

ゴジラが突然やってきた！

＜私のニューヨーク物語⑤＞

先にも触れましたが、私がニューヨークに赴任したのは、松井秀喜のニューヨークヤンキース入団と同時期でした。海を渡ったのは、10日間くらいの違いだと思います。

今は、大谷翔平選手が全国民の絶大なるヒーローかもしれませんが、当時は、松井選手とイチロー選手がプロ野球界のヒーローであり、海外で活躍するスポーツ選手のトップランナーだったのです。

学校の仕事は、異国の地の日本とは異質な業務でしたので、かなりのストレスでしたが、松井選手の出場する試合を現地で何度か家族で見に行く機会があったのは、楽しく忘れられない思い出です。

その松井選手が、渡米して2年目、レフトへの打球を補球した際に、左手首を骨折するアクシデントが起きました。在留日本人はこぞって心配し、彼のプレーをしばし見れなくなることを残念な気持ちでいました。そこで、私の勤務する補習授業校は、松井選手の一日も早い回復を祈って、全校生徒で色紙や千羽鶴を送ったりしたのです。

噂では、日本人学校も同様な取組をしていたようで、そのお礼にと、松井選手はまず日本人学校を訪問しました。日本人学校は半ば文部科学省公認の正規の学校ですので、日本人学校を差し置いて、我が補習授業校に先に来ることなどは絶対にないだらうと、補習授業校関係者の誰しものが納得して受け止めていました。

でも、次は当然我々ニューヨーク補習授業校の番だと、私も周囲も大いに期待していましたが、一向にその気配がないのです。日増しに、生徒、保護者、先生方からの私へのプレッシャーが増幅していくのがわかりました。

「一生懸命鶴を折ったのに、どうして来てくれないの。」「うちの学校の方が日本人学校よりも子どもの数は何倍も多いのに。」「松井はいつうちに来てくれるんだ。」「教頭先生何とかしてよ。」

私も指をくわえているわけにもいかないの、大学時代、銀行員時代、日本人会のあらゆる人脈を駆使して松井選手来校への道を模索しました。いろいろなツテを使って働きかけても来てくれる確証を持ってないまま、さらに日数が経過し、周囲の雑音も次第に影を潜め、松井選手の来校のことなど忘れ去られようとしていたある日、突然私宛に一本の電話がかかってきたのです。電話の相手は、松井選手のマネージャー兼通訳のH氏でした。

「教頭先生、たいへんご挨拶が遅くなって申し訳ございません。先生の学校の子どもたちから松井にたくさんの激励をいただきありがとうございました。たいへん、遅くなりましたが、松井がぜひ御校に伺って、子どもたちに直接お礼をさせていただきたいと言っています。急ですが、明日お伺いしたいのですが。」キターーーーと興奮しました。

「つきましては、ひとつお願いがあります。先だって日本人学校を訪問した際は、子どもたちを押しつけるように、保護者や先生方が我先にと近づいてきて写真を撮ったり接してきたんです。松井は、ああいうのを快く思っていないのです。お礼を伝えたい真の主役は子どもたちで、子どもたちを最優先に大切にしたいのです。」

「そこで、日本人学校の二の舞にならないように、今回松井が学校を訪問することは、先生の胸の内だけに留めてもらって、他の誰にも絶対に教えないでいただきたいのです。」

翌日、学校に向かう車の中の松井選手とマネージャーと逐一携帯電話で連絡を取り合いながら、迎え入れのタイミングを見定め、ある秘策に打って出ました。松井選手が到着する時間を見計らって、全校生徒に次のような緊急放送を入れたのです。

「全校の皆さん、授業中ですがよく聞いてください。これより緊急の避難訓練を実施します。訓練ですので、慌てず落ち着いて避難してください。『ただいま学校に不審者が侵入しました。全員、大講堂に避難してください。』」と。

実施の事前連絡もない避難訓練など前代未聞のことだったので、子どもたち以上に先生方がとても訝しい表情で大講堂に集まってきました。全員が揃ったのを確認してから、

「皆さん、不審者ではありませんでした。スペシャルゲストの方がいらっしやいました。」そう言って、松井選手を登場させたのです。

あの時の子どもたちの驚きと絶叫たるや、忘れようにも忘れられません。松井選手からの御礼の言葉のあと、質問コーナーで盛り上がって終わると、マネージャーが私に「先生、松井を入れて子どもたちと記念撮影しても構いませんよ。」と言ってくれたのです。

と言ってもサプライズの演出だったために、誰もカメラなど持ち合わせていませんでしたし、私自身もそんな余裕がありませんでした。ところが、松井選手の動静を伝え聞いて取材に来ていたフリーのカメラマンが一人いたので、「すみませんが、記念写真を撮っていただけませんか？」とお願いしてみたのです。

すると、慌てて松井選手のマネージャーから、「ダメダメ、このカメラマンは、『Number』などの有名雑誌に松井の写真を頻繁に掲載している一流のスポーツカメラマンなので、集合写真なんてとんでもない。」と言われました。

ところが、そのカメラマンが「いいですよ。」と嫌な顔をせず引き受けてくれたのです。当時 30 クラスほどあった各クラスが順々に集合隊形をつくり、松井選手自らがあっちにこっちにと移動して集団の撮影の輪に入ってくれました。

記念撮影の写真を販売する段取りをしたところ、一流のプロのカメラマンが撮影した記念写真ということもあり、日本の実家や友人に送るからと何枚も購入する家庭ばかりで、たくさんの注文が入りました。販売代金が臨時収入になったことで、結果的にそのカメラマンさんからもたいへん感謝されることになったのです。

松井選手来校の様子を子どもから聞いた保護者は、自分たちが蚊帳の外であったことにやや不満の色を見せつつもその理由に理解を示し、子どもとともに喜びを爆発させました。

最後に、松井選手と二人きりになる時間がありました。体だけでなく、心も大きく、誠実さや謙虚さが伝わる方でした。「今日はありがとうございました。先生の仕切りはお見事でした。完璧です。」と感謝されて、サインを戴いたのが昨日のこのように蘇ります。

この松井選手来校の件は、校長先生にも妻にも内緒でした。校長先生には、「秘密にしろと言われたとしても、上司である俺には普通伝えるものだ。」とひどく怒られました。

それ以上に妻には、「私に話したからと言って、私が他の人に漏らすとでも思うの？信じられない。あきれた。妻の私にも知らせない

なんて。」と本気でキレられました。

いろんな人にどれだけ「ここだけの話だけど・・・」と打ち明けたかったことか。「明日、松井が学校に来るんだぞ。」と、どれほど大声で叫びたかったか。でも、そうしなかったのは、約束を破ったら何か物事がうまくいかない結果になるんじゃないかといった漠然とした思いです。日本一おしゃべり好きの私が口の堅さを貫いた一世一代の覚悟、人生最大の勝負の瞬間だったのです。

私のようないい加減な人間が、教師を辞めないでこれまで続けてこれたのは、松井選手が学校を去る際に、ある言葉を私に残していてくれたからかもしれません。

「それにしても、先生は学校の先生に全く見えませんね。先生のような、学校の先生らしくない先生に会ったのは初めてです。」

教師人生最大の賛辞と受け止めています。